HISTORY

関西を創った先人の足跡

水を征した2人の明治人。

田辺朔郎（琵琶湖疏水）と大橋房太郎（淀川治水）

使命感が原動力だった。

明治時代に完成した２つの大事業、琵琶湖疏水と淀川治水。粗末な資材と人海戦術、そして進取の精神で今に残る大事業を成しえたのです。琵琶湖疏水の田辺朔郎と淀川治水の大橋房太郎。彼らの不屈の精神と使命感には、時代を経ても学ぶべきものが多々あると思います。

近代産業は琵琶湖疏水が育てた。

滋賀県大津市から京都の伏見まで約20キロの人工の川・琵琶湖疏水。明治18年(1885)に工事を始め、同23年（1890）完成しました。この工事を監督指揮したのが、当時23歳だった田辺朔郎。そのきっかけは、21歳、工部大学校の学生だった時の卒業論文「琵琶湖疏水計画」が、京都府知事・北垣国道に注目されたことによります。彼は田辺を京都府の職員に招き、国家予算総額約7000万円、内務省土木費総額100万円の時代に、工費125万円という琵琶湖疏水の大事業の設計・施工の最高責任者に任命したわけです。京都を産業都市として飛躍さすためには、興産政策を推進すべきと北垣知事は考えていたようです。そのためには600馬力の水力を得るべく、琵琶湖から水力を拓くことが必要だったのです。

田辺朔郎の像

弱冠23歳の工事監督 世界で2番目に水力発電所を造る。

さて琵琶湖疏水における最大の難工事は、大津の長等山トンネル。ここで田辺は、２本のシャフト（たて坑）を掘り、そこから東西に掘り進め、同時にトンネルの入口、出口からも掘りすすめるというシャフト工法を、日本で始めて採用しました。当時の最長トンネル記録を一挙に1,100ｍ越える2,436ｍのトンネルを日本人だけの手で見事に完成させたのです。ノミとハンマーの人海戦術であり、照明はすべてカンテラ。ダイナマイトや雷管は輸入。セメントも貴重品。湧水との闘いと手探りのような中で創意工夫を重ねながらの工事経験は、我国のトンネル技術の進歩に大きく貢献しました。彼の偉大さは、最先端の土木技術、実行力、不屈の精神力だけにとどまらず、優れた先見性にあるといえましょう。工事途中、アメリカで水力発電が成功したというニュースに接すると、直ぐにアメリカまで視察。直ちに、琵琶湖疏水の最初の計画を急きょ変更し、蹴上発電所を設けて我国最初の水力発電、世界でも二番目の水力発電所を京都に誕生させました。以後、北海道全道の鉄道路線選定や、全国各地の運河、水力発電の計画・設計の指導に大きな足跡を残したほか、鉄道橋梁・軌道の試験法や関門トンネル調査に業績をあげました。我国の都市や地域の開発・近代化を促進するとともに、我国の土木技術の発達に大きな貢献を果たしました。

田辺朔郎の立像と紀功碑

田辺朔郎の略歴

1861年～1944年。幕臣の子として生まれるが、生後９ヵ月で父を亡くす。明治16年、工部大学校卒業と同時に京都府に奉職。琵琶湖疏水完成後、工科大学（現東大工学部）の教授に就任。我国土木技術の発展に大きな貢献を果たした。享年83歳。

琵琶湖疏水第一隧道入口

「オレは一生淀川治水のために働く」房太郎、25歳の決意。

淀川。琵琶湖に水源を発し、近畿の中央部を斜めに横断して大阪湾に注ぐ大河。長さは琵琶湖流出口から新淀川河口まで75km。近畿の水がめでもある。百科辞典風に述べるとこんなところでしょうか。豊かな水をたたえゆったりと流れる様は、平和そのもの。しかし、古来から治水の上では難川といわれ、推古朝９年から大正14年までの1,325年間に、134回もの洪水を記録。実に11年に１回の割合で水害を起こしていたわけです。特に明治18年の大洪水は、流失家屋2,612戸、死者293名という大災害をもたらしました。この“暴れ川”淀川の治水に力を尽したのが、大橋房太郎。日清、日露の戦争で財政的に余裕のなかった当時の政府に、淀川改修の大工事を実行させ、淀川治水の基礎を造りました。その功績は、大阪府四条畷市にある四条畷神社境内の「淀川治水功労者大橋房太郎君之碑」が今も伝えています。

大橋房太郎の像

司法官への道を捨て、淀川治水に一生を賭けた房太郎。

氏は1860年10月14日の生まれ。青年期には、司法官となるべく東京へ出ていましたが、明治18年、淀川大氾濫の報に接し、帰阪。その惨状を目のあたりに見た時、この川の治水に一生を捧げようと心に決めたようです。明治24年に、府会議員に当選（26年間議員を努める）。府参事会員となってたびたび東京に赴いて陳情するなど、淀川治水の運動に邁進。そのかいあって明治29年２月衆議院で「財政の許す限り工事に着手することを望む」との決議案が通過しました。同年５月から実施測量に入り、改修工事が始まりました。しかし、敷地買収という難問もあり、買収に反対する人や買収で何か儲けを企てている人などから「政府の犬、大橋を殺せ」の声もあり、まさに命がけ。事実何度も襲われたようです。しかし、幾多の苦難を乗り越え新淀川の開削、毛馬閘門の築造なども完成し、同42年６月には、淀川改修工事竣工式が挙行されました。その後も淀川低水工事の実施、淀川増補工事施行するなど、淀川治水のために東奔西走した一生でした。

紀功碑

大橋房太郎の略歴

1860年～1935年。現在の大阪市城東区放出に生まれる。27歳の時、放出の戸長の役を引受ける。その後、府会議員として大阪府常置委員、あるいは府参事会員となって河川改修に終身努力をつづけた。享年76歳。まさに治水翁の名にふさわしい一生であった。

資料提供：大橋医院院長　大橋徹郎（大阪市城東区放出在住）
※氏は房太郎氏のお孫さんです。

淀川（上流から河口を望む）（大阪市東淀川区）